リフォームをめぐる人々 5

月1回掲載

三井のリフォーム 住生活研究所 所長　西田恭子

駄目なものは駄目？　嫌なものは嫌！

会社で責任ある立場になり、年齢も上がってくると、部下や後輩に対して「駄目なものは駄目」と言下に物言う方が増えてくる。

『俺も気が短くなったかな』と内心思いながら、同時に後輩へのはっきりとした提案ができることは良いことであり、求められてもいる。

しかしなぜか我が家のリフォームの時には、「妻だけには、会社のように、これがうまくいかない」と、嘆く夫がいる。

いつもは優しい妻、あるいは従順な妻と思っていたはずが、家のリフォームになると、「妻がテコでも動かない（言うことを聞かなくなる）」と言うのだ。

リフォームを一家の事業の一つとしてとらえる夫が増え、リフォームに参画することは大事なことだが、我が家のリフォームの希望が、夫婦ともに同じとは限らない。

先日も八畳の和室を六畳にして居間を広げたい、と奥様が希望。しかし、床の間付きの落ち着いた和室が気に入っているご主人は、変える必要を感じていない。

話し合いの最後の決め台詞は、「どうしてこのままでは駄目なんだ？」と聞くご主人に、奥様は「だって嫌なのよ」と言う。奥様のこの台詞は、甘えるように言う方もいれば、突き放すように言う方もいる。

私は、ああ言葉がかみ合っていないなあと感じ、これは力関係で決まってしまいそうだと、嫌な予感がする。

ご主人の「聞く」という問いかけに奥様は「答える」のではなく、「嫌だ」と「言っている」のだ。そんなときには大概は奥様の意見が通る。駄目には理由がいるが、嫌には理由も理屈も不要だ。

たった一つの我が家の家づくりが、家族の力関係で決まってはいけないと、日ごろから私は心がけてきた。それは「スポンサー＝施主」という一般的な概念では、家づくりをしてはいけないと思ってきたからだ。

また決定者ではなく、家づくりは、家族の総意で進めるべきだと思っているからである。そしてそれはどんなに偉い方でも、夫の言い分ばかり聞いてはいけないと、私の中では同意語でもあったが、近頃はそんな心配は不要になってきた。

仲介者として双方の意見の取りまとめをし、方向性を模索するが「嫌なものは嫌！」という言葉にはさらなる問いかけは難しい。そしてまたその決定が家族円満なだけではなく、確かにその方たちの暮らしにマッチしていることが多いのも、妻が家に正面から付き合ってきた姿勢の長さから確かなようだ。

夫も本気でリフォームに意見を述べるためには、日頃から我が家の暮らしに目を向けておく必要がありそうだ。

西田恭子氏のプロフィール＝一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。昨年より新設した「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。